

万葉「こもりづま隠妻」考

新谷正雄

要旨

本稿は、従来「男との関係を秘す為に隠っている妻」と捉えられて来た、万葉集に見る「隠妻」の意味について、考察を加えたものである。そしてその結果、「隠妻とは、今は親の監視により、関係を結ぶことは勿論、接触することすらできないものの、いつか関係を結び妻となることを夢見る男の、女に対する呼称」という結論を得た。

まず考察上の紛れを排除する為、考察対象を「隠妻」と表記されてあるものに絞り、「隠りたる妻」等、類似した表現をその対象から除いた。そうすると「隠妻」とは、母親のもとに隠り、接触、或は関係を持つことができない、男の思いの対象としてのみの女という像が浮かび上がって来る。

この像が「隠妻」の意味であることは、「隠り」という言葉自体の意味からも確かめられる。「隠り」とは、外界との交流の断絶を意味する一方、隠りの後、復活が果たされるという意味を含んでいた。「隠り」の状態にある女とは、この言葉の意味からも、幼女から成女へ変身する為、母親のもとに、一定の期間「隠る」女と捉えられるのである。また「隠妻」の「妻」とは、将来、自分の妻になるという願望、期待を込めた呼

称であったと考えることができるのである。

このような「隠妻」理解にあたり問題になるのは、卷一三の、天皇の妻問を歌った三三二二歌の例である。そこでの「隠妻」は、既に天皇との関係が存在しているかのようなのである。しかしこれについては、天皇の、或る女に対する始めての妻問の場面と理解すること、そして関係があるかのように見られるのは、世の一般の男との接触を避け「隠り」の状態にある女の心さえも捉えてしまうという、天皇の「いろごのみ」を形象する為の表現、と理解することで、他の「隠妻」歌表現とは矛盾無く、統一的にその意味を把握することができると思われる。

一 はじめに

万葉集には「隠妻」という言葉が、次に掲げるように八例ある。⁽¹⁾この言葉は、上代では万葉集以外には見られず、一つの歌言葉として認めてよいだろう。歌言葉とは、歌表現に見られる、歌人達が共通に抱いた特殊な或る意味を負った言葉ということである。この言葉の負った意味を考えるのが本稿の目的である。

1 秋萩の花野の薄穂には出でずわが恋ひわたる隠妻はも

(10・二二八五)

2 色に出でて恋ひば人見て知りぬべし情のうちの隠妻はも

(11・二五六六)

3 天飛ぶや軽の社の斎槻幾世まであらむ隠妻そも

4 しなが鳥猪名山響に行く水の名のみ縁さえし隠妻はも

一は云はく、名のみよさえて恋ひつつやあらむ (11・二七〇八)

5 里中に鳴くなる鶏の呼びたてていたくは泣かぬ隠妻はも

一は云はく、里とよめ鳴くなる鶏の (11・二八〇三)

6 春されば 花咲きををり 秋づけば 丹の穂にもみつ 味酒を 神

名火山の 帯にせる 明日香の川の 速き瀬に 生ふる玉藻の う

ち靡き 情は寄りて 朝霧の 消なば消ぬべく 恋しくも しるく

も逢へる 隠妻かも (13・三二六六)

7 隠口の 泊瀬の国に さ結婚に わが来れば たな曇り 雪は降り

来 さ曇り 雨は降り来 野つ鳥 雉はとよむ 家つ鳥 鶏も鳴く

さ夜は明け この夜は明けぬ 入りてかつ寝む この戸開かせ

(13・三三三〇)

反歌

隠口の泊瀬小国に妻しあれば石は踏めどもなほし来にけり

(13・三三三一)

隠口の 泊瀬小国に よばひ為す わが天皇よ 奥床に 母は寝た

り 外床に 父は寝たり 起き立たば 母知りぬべし 出で行かば
父知りぬべし ぬばたまの 夜は明け行きぬ 幾許も 思ふ如なら
ぬ 隠妻かも (13・三三二二)

反歌

川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来る夜は常にあらぬかも

(13・三三二二)

8杉の野にさ躍る雉いちしろく音にしも哭かむ隠妻かも

(19・四一四八)

隠妻の意味についての一般的理解として、辞書のそれを示せば次の通りである。即ち『時代別』は「人目を避けてとじこもっている妻」とし、『岩波古語』は「人目を忍ぶ関係にある妻」、『日本国語大辞典』(第二版)は「人目をばばかって隠れている妻。かくれとじこもっている恋人」としている。『時代別』が言う人目を避けて閉じこもるのも、男との関係を秘す為であり、また『日国』が妻と恋人の両方を掲げているが、妻と恋人との違いが万葉歌では明確ではないことを考えると、これら辞書の解釈は殆ど同一と言えるだろう。隠妻を「男との関係を秘す為に隠っている妻」というイメージで捉えているように見受けられる。諸注釈書の理解は必要なもののみ次節において触れるが、最近のものは、基本的にこれら諸辞書と同じ理解にあるように思われる。

しかしそこに問題は無いか。例えば万葉考は5歌の注で次のように述べている。

心の内のこもりづまはも(前掲2歌。新谷注)とよみしも同しく、

心に忍び思ふつまをいふべし、こゝは母が許にこもり或は隠して置
たるなどをいふにあらず。

この傍線部「心に忍び思ふつま」という理解は、否定されなければならないものなのかどうか。以下、詳細に論ずる事になるが、「隠妻」歌の表現から見て、このような理解も再考の余地があるのではないか、そして隠妻に複数の意味を認める、或は更にこの万葉考のような理解も含めた上で、もう一度隠妻の一義的、統一的な意味を考えてみる必要があるのではないか、と考えるのである。本稿は述べたように隠妻を歌言葉と見ようとしており、この統一的な意味を以下、考えて行くことになる。

尚、藤井貞和「万葉集の結婚」⁽²⁾ 大久間喜一郎「人妻・隠妻の文学」⁽³⁾ は隠妻の意味を考えるに際し、用例からその意味を帰納しようとしている。しかし対象を隠妻に限定せず、自己の隠妻と考える用例を含め考察範囲を広げてしまった結果、当時の婚姻制度の曖昧さの中にその問は解消されてしまい、明確な結論を出せずに終わっている。近藤潤一「『隠り妻』発想の論」⁽⁴⁾ は、隠妻が負っている観念を明らかにしようとする論で、その意図は評価しうるものの、しかしこれもその考察範囲を無限定に広げてしまっており、正当な結論は得られていないと言わざるを得ない。考察に際し根拠無くその範囲を広げることは避けるべきである。隠妻には「隠りたる妻」「隠れる妹」等の類似した言葉がある。或は「隠り」に似た「かくり・かくし」といった言葉もある。予断によりそれらの言葉を考察の対象にすることは、結論の正当性を危うくするものでしかない。これらの隠妻及びそれに類似した歌表現の例から、その意味を明らか

にしようとした論とは別に、言葉の負った歴史性を明らかにするという立場からその意味を考察したものに、多田一臣「隠り妻と人妻と」⁽⁵⁾がある。そこでは隠妻を、神婚幻想を根拠にした言葉であるとして、次のようにその意味を述べている。

隠り妻のコモリとは、神を迎える忌みの中にある状態を意味している。密閉された空間の中で、神を待ち迎えること、それがコモリ本来の意義であった。隠り妻とは、こうしたコモリの中にある巫女を意味することばであったのである。

その立論の意図から言えば、この結論は首肯すべきものと考えられる。しかし同論は抽象的レベルのものであり、これを直ちに個々の万葉歌表現の理解にあてはめることは難しい。本稿はこの多田の指摘を承認しつつ、しかしその方向とは別に歌表現に沿った形で隠妻の意味を検討し、個々の歌理解を深めて行きたいと考える。

また「隠妻」という語形からその意味に触れたものに、佐伯梅友「『所依』『所縁』の訓について」⁽⁶⁾がある。佐伯論は、隠妻を「男が周囲にその関係を秘密にしている妻」と捉える当時主流であった見方に対し、隠りが自動詞であるところから、女が隠っている意と捉えなければならぬと次のように述べた。

同様にして「こもりづま」を考へれば、これはやはり妻が人目をしのんでゐるので、自分が人目をしのぶところの妻ではないのではな
いか。

しかし自動詞・他動詞の別は、主体性とか自発性とかとは関係ないもの

だろう。時代は下るが、例えば次の『伊勢物語』第六五段(岩波大系)の他動詞コム・自動詞コモルの関係を見れば、その差異は無い、と見るべきである。

かゝるほどに、帝きこしめしつけて、このをとこをば流しつかはしてければ、この女のいとこの御息所、女をばまかださせて、蔵にこめてしをりたまうければ、蔵にこもりて泣く。

男との関係を持った女を御息所が蔵に押し込めたというのである。他人が押し込めたのであるからコムが本来と思われるが、女に視点を置いて語る時にはコモリとなっている。自動詞であるかどうかという点は、視点の置き所を示すものの主体性、自発性とは結びつかないのである。

二 問題

まず隠妻のツマの性別について触れておく。ツマとは周知の通り、上代にあっては妻の意でもあり夫の意でもあった。その為、例えば7歌の隠妻を古義が「隠夫」等としている。本稿はその意味を歌言葉として統一的に把握しようとするものであり、その立場から用例の全てを妻として行くわけであるが、前掲多田論が述べ、本稿では次節で触れる隠りの意味からも、ツマは妻とすべきであると考えられる。更に、訓表記の用字は「妻・孀・嬪」であり、集中「孀」で夫を指す例がある(2・一五三歌等)ものの、妻と考える方が穏やかであろうということ、そしてその歌の内容も特に妻であることを否定するものはない、ということもある。

隠妻が妻であるとして、本稿は、辞典類や諸注が説く、隠妻が周囲に

男との関係を秘している女の称であるとする理解には問題があると考えられている。隠妻が男の思いの対象であることには異論が無い。問題は、隠妻と男との間に恋愛関係⁽⁷⁾が有るのか無いのか、というところにある。「周囲にその関係を秘している女」という一般的理解は、男との間に恋愛関係があるとしている、と見てよいだろう。その上で、男との関係の存在や互いの思いを秘している女が隠妻だというわけである。しかしこの見方に明らかに矛盾すると見られる表現もある。以下、隠妻の歌を一首ずつ見ながら本稿の理解を述べて行きたい。尚、7歌については、一般的理解に合う継続的な恋愛関係があると捉えた方が穏やかか、と見られる表現があり、本稿の理解に障害となりそうなものである。その検討は最後の第四節に回すことにしたい。

4歌から見て行く。ここには「名のみ縁さえし隠妻」とある。周囲から恋愛関係にあると噂されているものの、実態はそのような関係にはないと歌っており、そのような女が隠妻だというわけである。作者とその思いの対象の女との間に若し恋愛関係があれば、逢えないことを嘆いたとしても、このように(隠)妻であることを否定する言い方の「名のみ」とは歌わないであろう。これは一般的理解とは異った隠妻の在り様である。隠妻とは思いを抱きつつも逢えずにいる女、言い換えれば恋愛関係にはない女の称ということになるのではないか。

3歌について言えば、初句から三句までの序詞は、序詞であっても歌全体の趣意と無関係ではなく、ここでは女が神社の神聖な槻の木に喩えられている。とすると女は俗界と区別された神社の中に居る、というこ

とになり、女が周囲から隔絶されてあることの譬喩ということになる。歌表現からは、この作者も他の男達同様、この女には近づけていないということにならないだろうか。例えば次の歌。

祝部らが齋ふ社の黄葉も標繩越えて散るといふものを

(10・二三〇九)

これも3歌同様、神域を恋の場面の譬喩に使っており、この点を考える上で参考になる。男が女に對し逢うことへの決断を迫ったと思しい「標繩越えて散る」とは、神域と外界、聖と俗の交流は不可能、或は越え難い隔たりがあるという觀念を基にしているように思われる。標繩とは交流の継続的な断絶の比喩であり、一時的な越境の障害等ということの比喩ではないだろう。3歌に戻れば、女は周囲から隔絶されており、その結果として作者である男は女との接触も図れず、有るのは単なる男の女への思いだけ、という状態の中に居るように思われる。そしてこのような状態がいつまで続くのかと嘆いているのである。女が周囲から隔絶されているとは、集中の他の歌の例から言えば、女親によるものと考えるのが無理の無い所であろう。それはこの齋槻のイハヒからも言える。イハヒとは、親に大切にされてあること、監視されてあることの比喩として見るべきであろう。結局3歌の隠妻は、母親の監視下にあり、作者が接触できないでいる、恋愛関係にはない女の称と考えられるのである。次に6歌を見てみる。主意は「うち靡き」以下にあり、一首は、心は寄り、消えんばかりに恋した甲斐あって今こうして逢えた、というものである。状況は必ずしも明白とは言えないが、この歌は長く恋して来た

男が女に初めて逢えた時の喜びを歌ったものと思しい。ここでの隠妻の意味はどうか。それまで逢えない状態で単なる思いの対象としてのみ心の中にあつた女を、その甲斐あつて逢えたというのだから、それまでは恋愛関係にはなかつたはずである。とすると、その思いの対象を隠妻と言っているということになるのではないか。仮に隠妻について一般的理解に立ち、関係を隠していた妻に逢えた歌とするならば、作歌時点以前に逢つたことの、或は互いに思い合つて来たことの表現が見られてもよいであろう。しかしここにはその点に関し何の触れる所も無く、それを窺わせる片鱗さえも見られない。一首は飽くまで恋の思いから初めての逢会へ、といった趣である。この6歌の隠妻も歌を素直に読む限り、やはり恋愛関係になる以前の称として、女を隠妻と呼んでいるように思われるのである。

1・2歌について触れる。両歌に見られる「穂に出づ」「色に出づ」に、顔色・素振に表れ、恋愛関係を周囲の人に知られてしまうこと、といった理解をあてはめれば、隠妻は「周囲に関係を秘している女」ということになる。しかし森朝男「いろ」⁸⁾は、これらの恋の思いの表面化を意味する言葉の対象が、実は万葉集中にあつては、相手に対してなのか周囲に対してなのかという点が不分明、或は同じこととして歌われていると論じている。従うべき見解である。その見方をここにあてはめれば、隠妻とは周囲に対し関係を秘している妻なのか、或は思いを打ち明けられないでいる相手の女、つまり恋愛関係にはない女なのか、区別がつかないということになる。或は相手の女に思いを打ち明けられないことが、周

囲へも思いが表面化しないことにつながっているとも考えられる。この二首によつても、隠妻の意味について、簡単に恋愛関係を周囲に秘している女と結論づけることはできないだろう。今まで述べ来た本稿の方向に沿い、両歌の隠妻を共に、まだ思いを打ち明けていない状況にあり、恋愛関係にはない女の称、と捉えることは可能と考えるのである。

5歌は、その鳴き声が人に聞かれてしまう鶏と対比させつつ、第三句以下で、そのようには泣かない隠妻、と人事について歌っているものである。⁹⁾ 隠妻の意味に絡んで誰が泣くのか、という問題がある。最近の諸注釈書は一首を、通説の隠妻の意味に沿う形で、「隠妻が、周囲に男との関係を知られてしまうので、人目を忍び、激しくは泣かない」意と捉えている。例えば土屋私注は「天廻む 軽の嬢子 甚泣かば 人知りぬべし 波佐の山の 鳩の 下泣きに泣く」(記八三歌)を引く。そこでは女の泣くことと周囲の人の知ることが関連づけられており、この理解も有力である。しかし一方、第三句の「呼びたて」は、男女関係に即して言えば、男(雄)が女(雌)に呼びかける意と見た方が素直なのではないか。そこからこの「泣く」の作者である男と捉え、男が人に思いを知られるように激しく泣くことはしない、忍び泣くのみ隠妻よ、と理解することもできるのではないかと考えるのである。このような見方から、隠妻を思いの対象であるだけの女として歌っている、と捉えることは可能であり、隠妻を恋愛関係にはない女と考えようとする本稿の立場からは、この見方を取りたいと考えるのである。

8歌は、題詞に「晝に雉を聞ける歌二首」とあるように、その哭声

を聞き、雉に呼び掛けた歌である。この歌にも5歌同様、哭く雉の性について問題がある。即ち、哭くのが隠妻である（或は隠妻であるような）雉なのか、或は雄雉が雌雉である隠妻をその対象として哭くのかという問題である。この前者の場合であれば、雄雉とそれを慕い泣く隠妻である雌雉との間には、既に恋愛関係があることになる。しかし、本稿は今まで述べて来たところから、この後者の理解を取りたいと考える。雄雉が思いの対象である雌雉を隠妻として哭いている場面と理解し、一首を、そんなに踊り跳ねる程の思いの中にある隠妻なのか、と雉に呼び掛けている歌と見るのである。雄が雌を求めて鳴く、という雉の習性からは、この見方の方が無理が無いと思われるが、注釈書にあってはこの立場を取るものは殆ど無い。ただ代匠記初稿本が「おのがこもり妻ゆゑねになかん物かとなり」として、本稿と同じ方向の理解を示している。このように意を取り、歌表現から積極的に言えることではないものの、隠妻を述べ来たように、男（雄）の、恋愛関係にはない思いの対象としてのみの女（雌）、と捉えることは可能と考えるのである。

7歌はまだ見ていない段階だが、ここで一先ずまとめれば、3・4或は6歌を積極的な根拠として、そして他の歌に於ても積極的に否定する根拠は見出せなかったところから、隠妻とは、恋愛関係にはない、男から見た思いの対象としてだけの女の称、と捉えるべきであると考えられるのである。隠妻は3歌で触れたように、まだ母親の監視の下にあり、男との接触、交流を禁じられており、その為、男は思いを寄せつつも恋愛関係に入ることが出来なかったのである。

三 隠りと妻と

先に用例から隠妻の意味を帰納しようとした。ここでは「隠り」の意味を確認する中で隠妻の含み持つ意味を明らかにし、また隠妻の妻の意味を確認することで本稿の見方の根拠を確かめておきたい。

まず隠妻の「隠り」について考えてみる。次の例を見られたい。

行方無み隠れる小沼の下思ひにわれそ物思ふこのころの間

(12・三〇二)

傍線部の隠れる小沼とは、沼の水が外界、それは人の世界であるが、そこに流れ出さずにある為、その存在が人には知られない沼を言うのである。「下思ひ」の「下」は、表面に現れない、外からは見えない知られないという意味である。そこから序詞成分としての「下」は、人の世界から隔絶されていることの譬喩に、本意成分に関して言えば、表面に出さない、相手や周囲に知られないという意になる。隠りの意味について確認すれば、沼の水が人界に流れ出さずにあることであり、それは外部と隔絶されており、交流の無いことを意味していると捉えられるのである。

人事に関する隠りの例には、越中で病床にある家持が池主に贈った次の歌がある。

……あしひきの 山き隔りて 玉梓の 道の遠けば 間使も 遣る
縁も無み 思ほしき 言も通はず たまきはる 命惜しけど 為む
すべの たどきを知らに 籠り居て 思ひ嘆かひ 慰むる 心は無

しに……

(17・三九六九)

山が隔て距離もあり、使いを遣る手段が無いので思うことも告げられない、というのであるが、言葉が通わないことをここでは隠りと表現している。この例からも隠りとは、前歌同様、外界との交流の無いことを意味する言葉であったことが知られるのである。

隠りとは周囲からの隔絶と捉えられる。しかし次のような例もある。

明け闇の朝霧隠り鳴きて行く雁はわが恋妹に告げこそ

(4・五〇九)

霧の中に隠っているため姿は見えない。しかし声は聞えて来るといふ。隠りが隔絶を意味するとすれば、聞えて来る雁の声は何なのか。隔絶というのはいき過ぎなのだろうか。この姿は見え声だけ聞えて来るといふのは、隔絶されてあるものについての情報も、どこからか洩れ広がっていくという、人の世の噂に重ねて考えることができるのではないか。

本稿に関しては、周囲と隔絶されながら隠る女の存在が、噂により周囲に知られて行くということになる。その具体的な例には、後掲9・一八〇九歌が上げられる。ここでは、隠りの状態にある女の存在を噂で聞きつけた男達が、家にやって来て求婚するのである。どこからともなく流れ来て人の心を強く支配する噂を、神の側のものだとしたのは古橋信孝「聞く」ことこの呪性¹⁰⁾である。噂により女の存在を知ることができ、またそのことで、9・一八〇九歌の男達の心もいよいよ噂にとらわれはやっただけである。先に隠りの意味を隔絶としたが、ここでその隔絶を、尋常の方法では交流することができない意味としたい。隠りにあるもの

と外界とを結ぶ通路は神の側、神的なものであり、それ以外の通常の通路は無いと考えられていたということ、これをまず隠りの含み持つ意味の一点目として確認しておく。

更に隠りの意味の含みについて確認して行く。次の歌を見られたい。

待ちかてにわがする月は妹が着る三笠の山に隠りてありけり

(6・九八七)

その出を待ち望んでいた月は、山に隠っていたのだった、という歌である(作歌時点を、月の出の前とるか後とるかで解釈は分れているが、論旨には関らない)。ここで注意したいのは、必ず昇って来る、或は日毎に繰り返し沈み昇る月に対し、沈んでいる時を隠りと表現していることである。隠りとは外界と隔絶(見えない)されてありながら、一方で隠りの後に外界との交流(月が昇り、見える)が実現、復活することを含んだ言葉であったのではないか、と考えられる。

次の歌では人の死について隠りと言っている。

河内王を豊前国の鏡山に葬りし時に、手持女王の作れる歌三首

(内一首)

豊国の鏡山の石戸立て隠りにけらし待てど来まさず

(3・四一八)

この隠りは、死という言葉 avoided 敬避表現と見られるわけだが、敬避である根拠は、直接的な言い方を避けた、というだけでなく、再び現れてくる、という意味の含みがそこにあったからだと思う。カクリとは異なり時間は長い、或は何時再び出て来るかも分らないという状況で

はあるものの、しかし必ず復活して来る、という意味があったのではないか。復活につながる隠りということである。

女の「復活につながる隠り」について触れる。次の歌は女に対し隠りが使われている例である。

たちねの母が養ふ蚕の繭隠り隠れる妹を見むよしもがも

(11・二四九五)

女が隠っているというのであるが、その状況は序詞の内容により知られよう。隠っている女とは、「母が養ふ蚕」とあるように、母親の監視の下にある女という意味に取ることができる。そして更に、先に述べた外界から隔絶された状態が隠りであるということからは、この女は母親の手により、周囲から隔絶された状態に置かれている女ということになる。しかしここでの隠りの意味はそれだけには収まらないように思われる。それは今述べた復活ということである。

次の歌を見られたい。先に触れた虫麻呂歌集歌「菟原処女の墓を見たる歌」である。そこでは次のように女の半生と、男達の求婚とが歌われている。

葦屋の うなひ処女の 八年児の 片生の時ゆ 小放髪に 髪たく
 までに 並び居る 家にも見えず 虚木綿の 隠りてませば 見て
 しかと 愠憤む時の 垣ほなす 人の詠ふ時 血沼壮士 うなひ壯
 士の 廬屋焼く すすし競ひ 相結婚ひ しける時は……

(9・一八〇九)

八歳から小放髪に髪を結ぶ時まで、隠り即ち周囲との関係を絶っていた

というのである。そしてこの処女に二人の壮士がヨバヒをしたという。ヨバヒは7歌にもあったが、妻問の意である。ここで八歳になった段階で女が隠りの状態になっていることに注目したい。この八歳の意味は、多田一臣「我や人妻」⁽¹¹⁾が説いたように、七歳以下との間の一つの年齢の区切りである。それまで自由であった女は、八歳となった時から周囲とは隔てられた状態で育てられ、そして再び世に現れる時を待つ、という観念が存在したのではないか。そこで再び社会に現れることが復活と認識され、そこから隠りという言葉が使われたと考えられるのである。先に掲げた11・二四九五歌の「繭隠り」も、蚕から蛹へ、更に蛾へと形を変えて再び世に現れることの意味を含んでいたはずである。

次の歌は隠りの状態にあった女が、自身について歌ったものである。さす竹の節隠りてあれわが背子が吾許し来ずはわれ恋めやも

(11・二七七三)

この第二句「節」は、歌の本意成分に関して世の意である。「あれ」は私注が言い、全注等が支持しているように已然形とし、佐伯梅友の言う「已然形でいひ放つ法」⁽¹²⁾と捉えるべきである。そして一首は、周囲から隔絶した生活を送って来て、恋等ということも知らずに過して来たところ、あなたが私の許を訪れたことで初めて恋を知った、という内容と考えられる。結婚を社会的に認められた男女の結合とすれば、女が再び世に現れてくる時とは結婚の時として誤りは無いだろう。この歌は、隠りの中にある女が男の訪れと共に、世に復活する段階に差掛った歌と見ることができるのである。

隠りとは復活を含み持つ言葉であることを、その意味の二点目として述べた。しかし女の復活の為の隠りが何を目的として行われるものなのか、歌表現からは直接知ることができない。しかし次の歌を参考にして、この点に触れておきたい。

やすみしし わご大君 高知らず 吉野の宮は 畳づく 青垣隠り
川次の 清き河内そ 春べは 花咲きををり……

(6・九二三)

「青垣隠り」が「清き河内」と対応しているように、隠っている土地は清浄な場所、聖地という観念が存したと見られる。この表現を基に、隠っているものは聖なるものであり、隠ることにより聖なる状態を保持できるとする観念があった、と考えられよう。この理解を女の隠りにあてはめれば、それは隠ること、或は隠らせることによる女の聖化と、その聖なる状態の保持を目的として行われた、と考えられて来るのである。これは多田注⁵論の言う、神の訪れを忌みの中で待つということになる。隠りにより身の清浄性を獲得し、神の訪れを待つ条件を整えることであり、人の世に置き換えて言えば、男の訪れ、結婚を待つことを意味する、ということになる。

次に「妻」の意味を確認する。前節では隠妻を、恋愛関係にはない、男の思いの対象としてだけの女の称と考えた。しかし例えば『時代別』では妻の意味を、「配偶者。夫婦・恋人の互いに相手を呼ぶ称。第三者から言う場合もある」としている。本稿の見方をこれと比較した時、一方的な思いの対象というだけの女を妻と呼ぶことがあるのか、という疑

問が生じるかも知れない。この点に触れておきたい。

確かに、『時代別』のそれは一般的な理解を示しており、互いに思い合う関係にはない女を妻と呼ぶことは、通常は有り得ないことである。しかし将来は自分の妻にしたい、なるのだという願望、期待を込めて妻という言葉を使うことがあったという想定は可能なのではないか。次の歌を見られたい。

ちはや人宇治の渡の瀬を早み逢はずこそあれ後もわが妻(後我
嬬)

(11・二四二八)

障害があり今は逢えないでいるが、将来は私の妻だよ、という男の歌である。「も」の理解に関り、一方に結句を、今もそうだが将来もずっと我が妻、と捉える見方もある。しかし「ありありて後も逢はむと(後毛将相登)言のみを堅め言ひつつ逢ふとは無しに」(12・三一―三)等ともあり、述べたように、「後も」は今は駄目だが「後にでも・将来は」等の意に取るべきである。⁽¹³⁾ 将来は自分の妻にしたいというこの歌の文脈の中での妻を、隠妻の妻に重ねることは可能のように思われる。つまり、今は隠っており周囲と隔絶されてある為、接触することすらできないものの、将来は自分の妻にしたいという男の思いを込めた、隠る女に対する呼称と捉えることは可能なのではないか、と考えるのである。妻と呼ぶかどうかは、客観的な恋愛関係の有無に関する問題ではなく、そう思う男の主観に關っていると見えよう。一方的な思いの対象としての隠妻の妻も、『時代別』のような一般的理解の中で成立する余地はある、と考えるのである。

先に、隠妻の隠りは復活の意味を持ち、女が周囲との交流を絶ちつつ、一方で男の訪れを待つ期間にあることの謂であると考えた。今、隠妻の妻について考えたことを重ね合わせるならば、隠妻とは、今は親の監視により恋愛関係にはなれないものの、いつか自分の前に立ち現れ妻になることを夢見る男の、女に対する呼称と考えられて来よう。このような隠り、妻に対する理解は、前節で歌表現から帰納した隠妻の見方を支えるものである。

以上述べ来たことに対し、反証になりそうなのが7歌である。今ままで検討を保留して来たが、この歌に対する本稿の理解を最後に示さなければならぬ。

四 天皇の結婚

既に述べたが、7歌は他の隠妻の歌とは異なり、以前から男女の間に何等かの関係があるように見られる表現を持つ。隠妻を男と恋愛関係にはない女の称と考える本稿の見方と、どう重ねられるのだろうか。

問題は大きな所で三つ程あろう。一つは問歌反歌で男が「妻しあれば」と歌いつつ訪問していることである。妻と呼ぶこと自体は、前節で述べた、男は女を思いの対象というだけで妻とも呼ぶ、というところから説明できるであろう。しかし、女の気持ちに不安を抱くこと無く行動するこの男の態度からは、相手が単なる思いの対象というだけの女という感じは受けない。継続的な関係の中で男が訪れている、或は確実に自分のもとを考えている女に対する訪問といった感じを受けるのである。こ

こは、二人の間には恋愛関係が既に存在している、と考えた方が理解し易いように思われる。

二つ目は、答歌長歌で「よばひ為す天皇よ」と、女が妻問の男を直ちに天皇と認識した問題である。恋愛関係にはないとしても、女は男との何等かの接触が過去にあり、そこから男を知っていたということが考えられるかも知れない。これもあり得そうだが、事前の接触があったとしても、恋愛関係に進まないような出逢いでは、「天皇よ」という呼び掛けが宙に浮いてしまうであろう。この言葉からは、男の存在を知っているという以上の、男に親愛の感情を抱き、期待しつつ待つ男を迎えた、という言葉の調子が感じられるのである。

三つ目は、同じく答歌長歌の「幾許も思ふ如ならぬ」である。この言葉にも男に向う女の気持は無視し得ないだろう。既に何等かの心の通い合い、恋愛関係があり、男との逢会が期待されながらそれが果されぬという、女のもどかしさがここに感じられるのである。⁽¹⁴⁾

全体として、男女の間に恋愛関係があると考えた方が理解し易い表現が多く、本稿で考えて来た隠妻の様相とは異なっているかの如くである。この様相の違いの要因はどこにあるのか。それは訪れる男が天皇といふところにあるのではないかと考える。天皇とは尋常な人物ではない。歌詞にある「天皇」を無視し、一般的な男の妻問と同列に論じては誤るだろう。本稿は、この点に関して7歌の理解を深めて行かなければならぬと考えるのである。

先に「天皇」の訓及び意味について確認する。原文は「天皇寸」だが、

この「寸キ」は、それを振ることでスメロキの訓を誤り無く伝えようとする表記の工夫と捉え、ここはスメロキの訓でよいと考える。次に意味について、『岩波古語』のように、一方にこれを地方首長程度の人物と想定する理解がある。しかしその表記を考えると、これを地方首長と解するのには無理があるだろう。集中「天皇」の表記で天皇以外を意味した例は無い。やはり表記通り天皇と見るべきである。

天皇であるとして、スメロキという呼称はどのように理解すべきか。天皇を指す言葉にはオホキミもある。実際、例えば仁徳紀には「やすみしし 我が大君は 諾な諾な 我を問はずな云々」(紀六三歌)という、天皇に直接呼び掛ける場面で使われている例もあり、この歌の場合、オホキミの方が適切なようにも思われる。スメロキの意味については、荒木田久老『萬葉考槻乃落葉別記』が「須米呂岐とは、遠祖の天皇を申奉る稱なるを、皇祖より受継ませる大御位につきては、當代をも申事のある云々」と述べているところが首肯される。そして7歌に関しては、この前半部分の過去の天皇の意味でスメロキが使われたのではないかと考えるのである。即ち、スメロキを用いたのは、過去の天皇、つまり古代的な王者としての天皇をここに表現したかったからなのではないか、ということである。具体的な天皇像としては、例えば記の仁徳、雄略等が挙げられよう。対面等、直接呼び掛けるような場で使われた例が他に無く、ここでのスメロキの意味をこのように捉えることの根拠を、用例により確かめることはできない。が、この見方は、後に行う歌表現の理解により補強されることになろう。以上のように7歌の天皇を捉えたところ

ここで、次に隠妻と天皇との関係について考えていきたい。

一般論として、女に対する天皇の行動を確認しておきたい。諸注、参考としてこの歌に次の記歌謡を上げるが、本稿もそれに倣いたい。

八千矛の 神の命は 八島国 妻娶きかねて 遠々し 高志の国に
賢し女を 有りと聞かして 麗し女を 有りと聞こして さ呼ばひ
に 有り立たし 呼ばひに 有り通はせ…… (記二)

出雲から越の国まで妻を求めてやって来た八千矛の神が、沼河日売を戸の向う側に置きながら歌ったものである。神は妻を求めて各地を広く訪ねていたことが知られる。神、或は神に準ずる天皇は、多くの妻を抱えながら更に妻を求めていくのである。天皇の結婚は、その国土支配の論理から言えば、土地毎に居るその土地の靈的な支配者としての巫女との結婚であり、それによる土地支配ということを意味していた。その為に天皇は各地の娘子を召し上げ結婚したのである。折口信夫言うところの「いろごのみ」⁽¹⁵⁾である。

記二歌に続き、八千矛神の行為を、正妻須勢理毘売は次のように歌っていた。

八千矛の 神の命や 我が大國主 汝こそは 男にいませば 打ち
廻る 島の崎々 播き廻る 磯の崎落ちず 若草の 妻持たせらめ
…… (記五)

あなたは男だから各地に通う女を持っているというのである。男一般とするのはまずいかも知れない。ここは飽くまで神の歌なのであるから、神の行為として女を各地に持っていたとすべきであろう。7歌の隠妻に

対しては、神である天皇のこのような妻問の対象としての女を考えなければならぬ。

ところで7歌は天皇の訪問時の歌である。本稿が考えて来た、男の訪れが無いとする隠妻の理解との整合性は、若し有るとすれば、天皇の最初の訪問時に歌い交されたものと捉える以外には無いであろう。それ以前であれば表現に矛盾し、それ以後であれば本稿の見方に矛盾する。この最初の訪問という想定に基づき、本稿の隠妻理解の可能性を、男が天皇であるという特殊性と絡めて考えてみたい。

天皇が偶々何かの機会に7歌の女に出逢い声を掛けた、と想定してみると、多くの女を集めることが天皇の支配者としての行為であったことかすれば、この想定に無理は無いだろう。述べた古代的な王者としての行為である。記の赤猪子、或は吉野の童女に対する雄略の例が参考になる。その場合、天皇は声を掛けただけで女を妻と認めることになる。天皇が声を掛けただけで、女の返事如何に拘らず、その結婚が決まるとは、雄略御製1・一歌からも言えよう。そこには雄略の求婚歌だけあって女の返歌は無い。女の承諾、結婚の成就是言うまでもない、ということである。天皇の求婚は天皇にとり直ちに結婚を意味したのである。

しかし女の側から見た場合はどうか。赤猪子の場合、声を掛けられたものの天皇の訪問を受けることが無かった為、後に「百取之机代物」を持って雄略を訪ねている。「百取之机代物」とは、邇々藝命と木花之佐久夜毘売、日子穗々手見命と豊玉毘売との結婚の場合にも見られ、これは結婚儀礼に関して女の側が天皇に差し出すものと理解できる。とする

と赤猪子は声を掛けられた段階で結婚は約束されながら、しかしそれはまだ果されていない、と考えていたことになる。だから「百取之机代物」を持って天皇を訪ねたのである。赤猪子の側は天皇の訪問を受け、しかるべき儀礼を行い、初めて天皇との結婚が成就すると考えていたことが知られる。7歌の女も、天皇と何等かの接触があり妻となることが約束された後、公式の結婚につながる天皇の訪問を待ち、そして7歌は、今その初めての訪問を受けている場面と考えられないであろうか。このように7歌を捉えるならば、歌の理解、隠妻の意味共に矛盾無く解くことができるのである。

即ち、歌表現に即し先に述べた疑問点に触れれば、赤猪子が天皇に声を掛けられ、その召しを待ったように、この娘子も何等かの機会に声を掛けられ、それから天皇の訪れを待っていた。そのようなことがあった為、男の訪れを直ちに天皇のそれであると知ったのである。また天皇が反歌で女を妻と呼んでいるのも理解できよう。一度きりの出逢いであっても、名を問うた段階で天皇にとり女は妻なのである。一方、女は自身を天皇の思いの対象、妻となるべき訪問を待つ女と考えていたものの、容易には逢えない親の監視下にある為、「幾許も思ふ如ならぬ」とその思いを表出したのである。この天皇の訪れは出逢いから暫くの期間を置いたものであったかも知れない。天皇が多くを妻を持つことを考えれば、雄略が赤猪子を忘れてしまったように、直ぐに妻問をする可能性の方が低いだろう。心の中で天皇と向き合い、思いを凝らし、天皇の訪れをただひたすら待っていたと考えられる。その為、長い間待ちそして初めて

天皇を迎え、これから長くそして常の訪れを、と反歌で願うことになったと考えられるのである。

次に、本稿の目的である隠妻の意味について触れる。今想定して来た背景を考えれば、声を掛けられたことで、女は自分に対する天皇の思いは確かなものと考えていたであろう。女が自分を天皇の思いの対象としての妻と考える根拠は、天皇から声を掛けられたというだけで十分である。しかし女は親の監視下であり、天皇が訪ねて来ても容易には逢うことができなかった。いまだ訪問を受けず、結婚の段階には到っていないこの段階では、女の状態は隠りと言えるだろう。天皇が訪れてくれたものの逢うことは叶わず、自分は天皇の単なる思いの対象に過ぎない、と女が考えていたと想像することができる。以上のように理解すれば、7歌の隠妻も、天皇の思いの対象としての存在であり、かつ外部と交流を行うことができない女、という意味で、第二節で考えた隠妻の意味と同一のものとして理解することが可能となるのである。

しかし次のような疑問が出されるかも知れない。今述べた想定では、天皇と7歌の女との間に、既に互いに相手を思う感情が有ったことになり、とすると二人の間には恋愛関係が存在していたことになり、男と隠妻とは恋愛関係には無いとした先の結論は誤り、或は修正しなければならぬのではないか、という疑問である。天皇の女への思いはよいとして、女の天皇に対する思いの存在が問題、ということである。この疑問に答えなければならない。

7歌の場合、天皇は女と直ちに逢うことは叶わなかった。天皇と言え

ども、親の庇護・監視の下にある女と逢うことには障害があった。崇神記の活玉依毘売を訪問した大物主大神も、やはり親に知られずに通ったのである。逆に言えば、神、天皇はそのような親の下にあり、周囲から隔絶されてある女にも心を通わせ通う、ということになるだろう。隔絶されてあるものとの交流は、神的な通路しか無いことは先に述べた。神の位置にある天皇のみがよくそれを成し得るのである。このような隠る女に対する交流が可能と考える観念、或はそのような表現を取らせる観念とはどういうものなのだろうか。ここに述べた古代的天皇の「いろいろの」が絡んで来よう。周囲と隔絶されてある女に対しては並の男は交流を図れない。このことは歌表現からも確かめられる。即ち、7歌以外の隠妻の歌においては、ただ男の思いだけが表出され、女の気持は全く知られない。男は隠る女の心を知ることさえできないのである。しかしながら天皇は、そのような隠る女の心をも捉えてしまう。女の天皇を迎えた喜び、逢えない無念さ、将来への期待が同時に表出されている7歌答歌の表現に、それを知ることができよう。

天皇は「島の崎・磯の崎」(前掲、記五歌)といった国の隅々から女を探し出して来る。通常の男の求婚を受け付けず、ただひたすら人の世から隔絶された隠りの状態にある女を残る隈なく見出して来て、その心を絡め取り通うのである。女全てを恋・結婚の対象と見る天皇ということである。7歌理解にあたっては、その背後にこのような「いろいろの」の観念を置いてみなければならない。とすると7歌の隠妻は、人の世の男に対しては心が動かされない隠りの状態にある女であるものの、

神としての天皇には心を奪われる存在、ということになる。7歌の意図、主題といった観点から言えば、天皇の「いろいろのみ」を形象する為、人の世の通常の男では交流を図ることができない隠妻が選ばれた、ということになる。一見、他と矛盾するかに見える7歌の隠妻も、神である天皇の「いろいろのみ」という観念を媒介させることにより、統一的な理解が可能になると考えるのである。

五 おわりに

従来、隠妻が、男との継続的な交渉、恋愛関係を前提とした上で、その関係を周囲に隠すものとして捉えられて来たのは、冒頭でも触れた婚姻制度の曖昧さと共に、多く7歌に因っているのではないか。7歌はいかにもそれらしい背景の下で詠まれたような表現を持っている。しかし本稿はそれとは異った視点から考えてみた。そこに見られる天皇（スメロキ）という表現から、7歌を「いろいろのみ」の観念を負った特殊な歌と見なし、逆に他の用例から隠妻の意味を帰納しようとしてみた。そしてこのような方向からの理解は、隠妻の意味の統一的把握を導くと共に、冒頭に見た多田注5論の言う、隠りの状態で神の訪れを待つ女、という観念的理解とも整合性を持つと考えたのである。その神とは、7歌では正に天皇であり、一般的には女を思う男自身ということになる。

注

- (1) 万葉集からの引用は、中西進「講談社文庫」による。
 - (2) 創樹社『物語の結婚』昭和六〇年七月（初出：笠間書院『五味智英先生追悼記念 上代文学論叢』昭和五九年三月）
 - (3) 塙書房『古代歌謡と伝承文学』平成一三年四月（初出：塙書房『青木生子博士頌寿記念論集 上代文学の諸相』平成五年二月）
 - (4) 副題：「相聞歌における隠妻的発想様式と叛乱皇子譚の抒情伝統における意味」『国語国文研究』第二〇号 昭和三六年十二月
 - (5) 明治書院『万葉歌の表現』平成三年七月（初出：『国語と国文学』第六三卷第一号 昭和六一年一月）
 - (6) 有朋堂『萬葉語研究』昭和三八年四月（初出：『文學』第二卷第三号）
 - (7) 本稿の言う「恋愛関係」の意味を明確にしておきたい。「恋愛関係」とは、男女が相思相愛の関係にあり継続的な接触がある、或は親や周囲の監視・干渉により、継続的な接触は無くても、互いに憎からず思い合う仲を想定してこの用語を使用する。固より憎からず思い合うとは、当事者の主観的な見方に関しており、客観的に判定ができるものではない。客観的には接触が無かったとしても、当事者達が互いに思い合っていると考えていけば、それは恋愛が継続していると考えられるからである。逆に「恋愛関係」にないとは、述べた「互いに憎からず思い合」っているという実感が持てない状態にあること、或は互いの思いを確認し合えるような出逢いをまだ持っていない関係、ということになる。
- 尚、以上は論旨に関しての定義であることを付言しておく。

(8) 勉誠社『古代和歌の成立』平成五年五月(初出:桜楓社『古代語を読む』

昭和六三年一月)

(9) 男女(雌雄)関係の表現に見られる「呼びたて」、また「いたく泣く」は、集中では専ら動物について使われている。それが5歌で人事に使われたのは、譬喩として用いられた鶏に引かれた為と思われる。

(10) 東京大学出版会『古代和歌の発生』昭和六三年一月(初出:『悠久』二四号 昭和六一年一月)

(11) 東京大学出版会『古代文学表現史論』平成一〇年二月(初出:原題「歌謡から和歌へ―我や人妻 古代和歌の表現の基層―」風間書房『和歌文学論集一 うたの発生と万葉和歌』平成五年一〇月)

(12) 晃文社『萬葉雜記』昭和一七年一〇月

(13) 主な注釈書の理解を示しておく。澤瀉注釋・古典全集・完訳・全注・新編全集は、本稿と同じ理解に立つ。また全釋・総釋・窪田評釋・佐佐木評釋・私注・全註釋・岩波旧体系・釋注は、結句を「後はわが妻」と訓んでいるが、本稿の趣旨に関しては、本文の訓「後もわが妻」と同じ意としてよい。一方、古典集成・講談社文庫・岩波新大系は「今も、将来も」という理解である。

また小学館『日本国語大辞典』(第二版)の「も::ぬか」の項には、「『も』は詠嘆を表わし、願望・希求の表現となる」とあり、万葉歌からは3・三三三歌、18・四一二三歌が例として挙げられている。本稿の理解に沿ったものである。

(14) 直接論じることとはしなかったが、窪田評釋等に言われるような、長歌と反歌のつながりの悪さという問題も7の歌群にはある。しかし結果的に、その

「つながり」についても本稿は新しい視点を供することになる。

(15) 「國文學」中公文庫『全集 第一四卷』、他。

(16) 「つながる」とは、平安時代の結婚披露である露頭につながる、建前上秘密の、男の第一・二夜の訪問を仮に想定して言っている。